

快挙！かごしま特別国民体育大会

少年女子優勝、成年女子3位、そして皇后杯獲得（女子1位）、天皇杯2位（男女）

3年前に、新型コロナウイルス蔓延のため中止された鹿児島国体がこのたび特別国体として開催された。また、「国民体育大会」という名称が今回最後となり、次回からは「国民スポーツ大会」となる。

そのような記念すべき大会で、山口県選手団が快挙を成し遂げた。

まず、高校選抜、インターハイと春夏6連覇を果たしている柳井商工女子メンバーからなる少年女子が、初の国体優勝を成し遂げた。ACT SAIKYOの選手で構成する成年女子も初の3位入賞を成し遂げ、見事皇后杯を獲得、天皇杯でも2位という山口県初の快挙となった。

特に少年女子は、平成29年と令和元年は準優勝とあと一步まで迫りながら届かなかった悲願の初優勝に、国体二連覇中の青森県を破っての到達となった。しかし、今大会の勝負所は決勝戦ではなく、ベスト8入りを競う3回戦での福島県との対決であった。福島県はふたば未来学園高校の選手からなるメンバーで、今夏のインターハイ決勝での対戦相手でもある。初戦ダブルスでは、田口・宮崎組がインターハイ・チャンピオンの山北・須藤組にファイナルゲームの末、接戦を制した。今年の世界ジュニアでダブルスチャンピオンとなった田口は、随所に流石のプレーを見せた。続く第1シングルスは砂川対石岡。砂川は2ゲーム目にマッチポイントを握ったが、惜しくもそこからの逆転負けとなり、福島県も簡単には勝たせてくれない。勝負となった第2シングルスは昨年の世界ジュニア・シングルスチャンピオンの宮崎対山北。これもインターハイ団体・個人の決勝と同じ対戦である。1ゲーム目は11点で宮崎が楽に取ったが、あきらめない山北は2ゲーム目を19点で取り返す。山北はファイナルゲームも力のあるスマッシュを打ち続け、リードして終盤を迎えた。しかし、そこから宮崎がチャンピオンとしての意地を見せ、21対19で逆転勝利を収めた。お互いの意地と意地がぶつかり合う、まさに事実上の決勝と言える好ゲームであった。

決勝の青森戦は、ダブルスは田口・宮崎組がインターハイ準優勝の清瀬・平本組に勝利し、続く第1シングルスは砂川と今年全日本ジュニア準優勝の横内との2年生対決となった。1ゲーム目を20対22で落とすも、最後まであきらめず足を止めない砂川は、ファイナルゲームを13点で取り優勝を決めた。砂川は今大会を通して成長が見られ、来年以降も柳井商工女子の活躍に益々期待が膨らむ。

成年女子は、1回戦が第4シードの青森県との対戦となった。ダブルスは重田・斉藤組が0対2で敗戦となるも、続くシングルスでは久湊と斉藤がどちらもゲームカウント2対0と完勝し、6年ぶりのベスト8進出を果たした。続く準々決勝は大阪府との対戦。息の合って



《初優勝の少年女子の監督・コーチ》

きた重田・斉藤組がダブルスを取り、第1シングルの久湊も勝利。初の準決勝進出を果たした。準決勝は実業団丸杉の選手からなる岐阜県との対戦となったが、力及ばず0対2で敗戦となった。対戦相手の岐阜県は優勝した。そして、3位決定戦では、東京都との対戦となり、まずダブルスを取った。第1シングルの久湊は最後まで持ち前のスピードをキープし、2ゲームとも18点で接戦を制し、見事に初の3位入賞を果たした。久湊は一昨年のインターハイのシングル・チャンピオンで、今後ますますの成長が期待できる。また、シングル選手でありながら、今大会でダブルスを兼ねた斉藤やそのダブルスをリードした重田の活躍も賞賛に値する。今後、S/Jリーグ等でのさらなる上位入賞が見えてきた大会となった。

成年男子と少年男子は、初戦でどちらも大阪府との対戦となった。成年男子はトナミ運輸の下農が入るダブルスとの対戦となったが、桐田が石井をうまくリードし、ファイナルゲームで勝利を勝ち取った。しかし、続く第1シングルの藤井、第2シングルの桐田が共に敗れ、1対2での敗戦となった。しかし、若い石井の成長ぶりには目を見張るものがあり、今後S/J-II等での活躍に期待したい。

少年男子は、ブロック予選から二人で勝ち上がってきた中村・中山組が健闘し、シングルでも中村が力を振り絞ったが、あと一歩及ばず敗退となった。

今大会を振り返るとナショナル代表選手、それも世界ジュニア優勝の田口、宮崎を擁する少年女子の試合ぶりは、たゆまぬ努力と豊富な経験に裏打ちされたものだと感じた。また、S/Jリーグ選手からなる成年女子も流石の試合運びであった。いずれも体力的にも精神的にも他チームに引けを取らず、明確な戦略のもとでの戦いぶりは見事であった。

日々の鍛錬を強く感じると同時に、山口県のバドミントン界が一丸となって取り組むチーム山口の成果を実感することができた。選手の頑張りはもちろん、監督、コーチそして県協会強化部の努力に敬意をはらうとともに、大いに感謝したい。

また、優勝した少年女子の試合には、山口県以外の一般の方も大勢が応援に訪れていた。試合後は会場外でサインや記念撮影を求める長い行列ができており、その人気の高さに仰天した。少年女子の竹光監督からは、「これをやっていかなければならない。」との言葉があった。山口県の選手が、バドミントンの人気上昇と普及の役割を担う時代がやって来ている。山口国体以来の合い言葉である「山口県をバドミントン王国へ」にさらに一歩近づいた鹿児島国体であった。〔敬称略〕



《3位入賞の成年女子の監督・コーチ》



《食事会場での山口県選手団》